

◎なぜ再洗礼派が社会秩序を揺るがす脅威として危険視されたか。

*「個人所有権の放棄」と、「武器を取ることを拒否」(社会の根幹に当たる問題に異議を唱えた)

*後世の再洗礼派が、以上の問題に絶えず熱心に取り組んだわけではない。

*今日のアナバプテストが、正義と平和に関する歴史的再洗礼派の視点をどのように解釈し、適用しているか。

<第6の中核概念>

霊性と経済問題は相関関係にあります。個人主義かつ消費主義社会において、また経済的不公平が蔓延する世界において、シンプルに生活し、寛大に分け与え、被造物をケアし、正義のために働くことをどう実践するか、その探求に努めます。

◎新約、旧約のどちらにおいても、霊性と経済問題は互いに深い関わりを持っている。

*貧困者、困窮者への配慮が求められている。

*使徒行伝では初代教会の様子が描かれ、資源の分配が信仰と弟子道に密接に関連。

霊性と経済

◎教会史の流れの中で

*初代教会の初めの300年間

・社会事業を手掛け、多くの民衆(未信者も含む)を助けた。政治権力とは結びついていないので、社会の構造改革には至らず。

*4世紀から16世紀

・キリスト教がローマの国教になり、教会が政治や経済や社会改革の実務を担える好機到来!と思いきや、教会は富裕層からの寄進を受けて彼らに擦り寄り、霊性と経済の関係など無視。所有物と社会的地位を保障する体制に迎合。社会的弱者を守るどころか、彼らを踏みにじる体制の維持に尽力。

・教会が十分の一税(教会税)を導入——クリスダムの新制度。貧困層はさらに経済的に困窮。

・再洗礼派(イエスの教えと初代教会の実践を模範とした)はクリスダム体制に抵抗。

・イングランド国教会の警告文(個人所有の根本原則を主張して、再洗礼派の考えを警戒)

共有制と相互援助

◎再洗礼派は共有制をいつも実践したのか。

・モラヴィアのフッタライト——聖書の根拠で共有制を実践

・悪しき例——ミュンスター事件

・再洗礼派が実践したのは、共有制よりも相互援助

◎「慈善」と「相互援助」の違いについて

(1) 経済問題と霊性の関連を「慈善」よりむしろ「正義」によるものとする。(一部の権力者を守る体制によって、大多数が貧困に追いやられている現実。慈善は不公平なシステムに対する対症療法。再洗礼派はシステムとしての正しい世界を追求)

神と私たちの関係は、経済面における弟子道と結びついている。

(2) 相互援助の実践は、個人主義に対抗する。個人主義は経済面で、個人の所有を重視。

しかし、再洗礼派は相互援助を単なる資財の分配だけでなく、文化的背景が引き起こす経済領域においてもイエスの弟子であることを目指す。

(3) 「消費主義の価値観」と「シンプルライフと知足の価値観」

(4) 相互援助は互惠と人間関係を暗示する。

◎英国のアナバプテストの実践例 (p145~146 参照)

◎富と身の安全が個人または集団の霊的成長を阻害することがある。

◎被造物のケアについては、再洗礼派だけでなくどのクリスチャンも着目しなかった。

*被造物のケアに対する再洗礼派の新たな信念

・イエスの人間性の強調 ・平和への献身

<第7の中核概念>

平和は福音の中核にあるものです。分断と暴力に満ちた世界にあって、イエスに従う者として、私たちは暴力によらない代替策の発見に取り組み、個々人の間で、教会内あるいは教会間で、社会において、さらには国家間で、平和づくりをどのように実践するかを学びます。

◎アナバプティズムは「歴史的平和教会」の伝統に属している。ただあらゆる暴力に反対するだけでなく、平和が福音の根幹であるという信念に立っている。平和への献身。

アナバプテストと非暴力

◎16世紀の中頃までには、平和主義が再洗礼派の中核概念として確立された。アナバプテストのクリスチャンは、戦争参加を求める社会の圧力に抵抗した。

◎初期の再洗礼派は、すべての人が享受する宗教の自由を擁護した(クリスチャンの諸教派だけでなく、ユダヤ教やイスラム教も含めて)。16世紀の再洗礼派は熱心な伝道者。

◎再洗礼派の「平和の証人」としての粘り強さ。平和の証人であることをやめてしまったグループとは一線を画す。(ディサイプルス派、プリマス・ブレザレン、アッセンブリーズ・オブ・ゴッド) 西洋の教会は、圧倒的に武力行使を是認し、それを正当化した。

平和と戦争、そしてクリスダム

◎歴史の中で変化してしまった「教会」と「平和」

*初代教会——紀元170年頃まで、圧倒的に平和主義。170年から313年(ミラノ勅令)の間に生じた変化——広い層から改宗者が起こされ、ローマの軍人も集うようになると、事態は変わっていく。

*コンスタンティヌス帝の改宗——十字架が軍のシンボルに。

*紀元416年——クリスチャンを名乗る者だけに入隊が許可された。戦争と手を組んだ教会。

*アウグスティヌスが「正戦論」を唱えた。「正戦論」は聖書の根拠を全く持たない。しかし、教会指導者は喜んで受け入れて当時の社会的要請に妥協した。

*「正戦論」——参戦が正当化される条件(・戦う理由が正当か、・意図が善いか、・成功する妥当な見込みがあるか、・その方法が適切か、・他の選択肢がもはやないのか、・正統な権威による宣戦布告)

この条件を満たす戦争などほとんどない。にもかかわらず多くの戦争が起きた。

平和づくりを学んで

◎今日、多くの社会で、いかなる宗教の信者もそうでない者も、人命を奪う暴力には反対。

◎再洗礼派の説く平和は、イエスの教えと模範に倣うもの。

* 付け焼刃ではなく、500年以上もの歳月を耐え抜き、迫害の中で精錬された信念に基づく平和主義。平和は福音の中核。平和の君なるイエスに従う弟子としての自覚。

* 到来しようとしている神の国のしるしとして「平和」をとらえている。

* 「平和をつくる方法を学ぶ」ことに献身。非暴力と無抵抗を混同しないこと。

◎アナバプテストが取り組む平和づくり (p.156 参照)

* 犯罪や不正に関してのアプローチの違い（修復的人間的対応か懲罰的で暴力を用いる方法か）前者の方法の方が社会を変革する力になる。

* 再洗礼派の伝統——非暴力による抵抗、敵を愛すること、信仰を深める苦闘。

* ディルク・ヴィレムスに見る「敵を愛する」ことの実例。彼が敵を愛することを当然と考える共同体（教会）で養われた結果、とった行動が多くの示唆を与える。「平和教会」の中で成長することと、聖書によって培われた非暴力の平和づくりこそが、真の平和への道。

* ジョン・ストーナーによる「平和のための謙虚な提言」——「世界中のクリスチャンは合意しよう、互いに殺し合わないことを」この提言の持つ深い意味を考えよう。

結論

* 経済と安全保障の問題は、すべての社会において根幹的に重要事項である。

* 今までの社会通念や定説に対する疑問提起は、強い感情的反応を引き起こす。しかし、私有財産と利己主義を基盤にした経済がもたらした結果を見よ——→軍事、消費主義を土台にした文化は不安定であり、そのような社会がこれからも存続しうるか。

* 再洗礼派にも弱点も欠点もある。他の伝統からの洞察も感謝をもって受け止めよう。